大阪あちこち

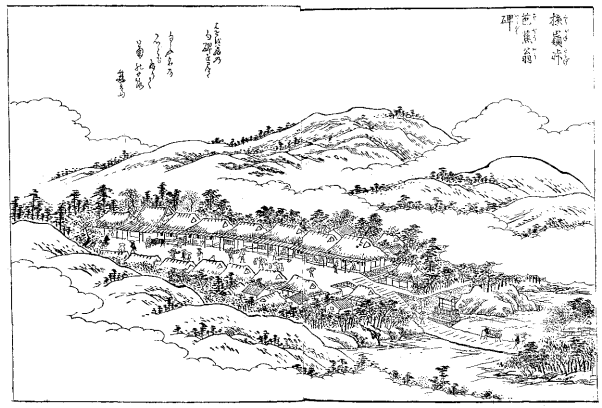
●暗越奈良街道と暗峠

河内平野を横切り、生駒山地を越えて大阪と奈良とを結ぶ街道としては、北から中垣内越（古堤街道）、暗越（奈良街道）、十三峠越（十三街道）、亀ノ瀬越（北八尾街道）などがありました。

このなかで生駒山の南側鞍部に位置する標高455mの暗峠を越える暗越奈良街道は、大阪と奈良とを最短距離でつなぐ八里八町（約34km）の道です。生駒山を越える部分は、枚岡神社の北側の豊浦谷に沿って急な登りが続く山道で、かつては枚岡神社からの道が交わる「くらがね橋」から、700mほどの間、谷の南側を登っていましたが、明治時代に谷の北側に現在の道がつくられました。「くらがり」の名は“木々がうっそうと茂るところ”という意味の「くらなり」が訛ったものといわれています。

この道は古代から利用された古道の一つですが、豊臣秀吉が大坂城を築城後は人や物資の移動に多く利用されるようになり、江戸後期に伊勢参りが流行するにつれて人の往来がますます増加しました。参勤交代の際に大名の多くが使用する、いわゆる本街道ではありませんが、大和郡山藩はこの道を利用し、行列の通る峠がぬかるまないよう石畳を敷いたと伝えています。享和元年（1801）刊行の『河内名所図会』に描かれているように、かつては「河内屋」「油屋」など20軒近くの茶屋や旅籠があり、明治以後も大正３年（1914）に大軌電車（現在の近鉄奈良線）が開通するまで重要な交通路として利用されました。昭和61年には建設省（当時）により「日本の道100選」に選定されています。

暗峠の石畳

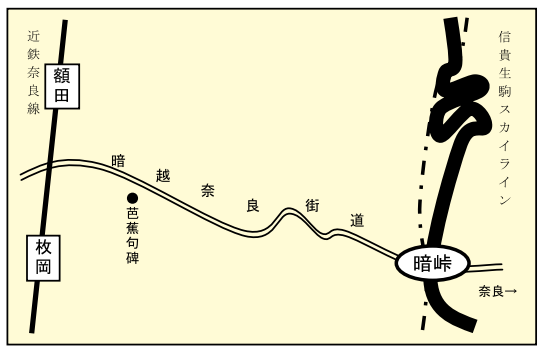


『河内名所図会』に描かれていた暗峠（椋嶺峠）

「菊の香に　くらがり登る　節句かな」

これは元禄７年（1694年）９月、松尾芭蕉が伊賀から大坂に向かう道中、暗越えの折に詠んだ句で、街道沿いには句碑が建てられています。他にも峠付近には、生駒宝山寺への分岐を示す安政６年（1859）の道しるべや、「和州矢田山出迎地蔵尊」と刻む万延元年（1860）の道しるべ、伊勢参宮の記念碑である文政13年（1830）の「おかげ燈籠」などが残され、歴史を偲ぶ多くのハイカーによって賑わっています。

安政６年の道しるべ



▼お問い合わせ先▼
東大阪市教育委員会文化財課
TEL　06−4309−3283